
ブルマーの追憶 ~ おもらしからはじまる恋愛小説 ~

山下沙織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルマーの追憶 ～おもしろからはじまる恋愛小説～

【Nコード】

N1047Z

【作者名】

山下沙織

【あらすじ】

給食のあと保健室で吐いてしまった幼なじみの涼。彼を介抱するとき、沙織は涼の吐いたもので制服を汚してしまう。

制服を洗うため^{ブルマー}体育着に着替えながら、恥ずかしさの混じった違和感を感じる沙織。そのまま教室へ戻ると周囲から好奇の視線にさらされ、ますますその思いを強くする。

沙織はその状況を、昔幼稚園のときおもしろししてしまって自分だけ

ブルマーを穿かされていたときの情景と重ねあわせる。でもそのとき同じクラスにいたはずの涼の姿が思い出せない。不安に苛まれながら次第に尿意を高めていき、幼稚園のときのようにおもらししてしまう沙織。

ふたたび保健室へ戻った沙織を見た涼は？

学園を舞台に、過去と現在の間で気持ちを交錯させながら、おもらししてしまったことが彼との距離を縮めていく、恋のファンタジーを表現しました。

不思議な罪悪感（1）

それは保健委員だから、という理由だけではなかった。そして、それがすべてののはじまりだった。

給食後に急に吐き気を催した涼を、沙織は支えながら保健室へ歩いていった。幼稚園の時の同級生でしばらく離れ離れになっていたがこの学園に入って再会したふたり。優しく、快活なしゃべりでも沙織を笑わせていた涼が、いまは顔を青くして黙っている、その異変に、沙織は黙って見ていることができなかった。

保健室までは我慢した涼だったが、保健室の暖かい空気に包まれた途端、安心したのか急にこみ上げて立ち止まった。口もとを手で押さえてうつむいた涼を支えようと、沙織が思わず身を乗り出した瞬間、涼の手の隙間からさっき食べたばかりの給食が少しあふれ出てきた。それは夏服になったばかりの沙織のブラウスとスカートを汚した。

保健室の先生がキャスター付きの洗面器を持ってきて涼の前に置くと、やさしくそして強く、涼の背中をさすった。

「涼くん気持ち悪かったのね、もう大丈夫だから・・・、ゲエしてごらん。はい、ゲエ」

先生のやさしい言葉に促されるように、涼はしばらくうつむきながらだんだん下あごをしどけなく開かせると、洗面器の中にたくさん嘔吐した。沙織は涼の肩を黙って支え続けた。口もとを汚しながら、沙織の目の前でさっき食べたばかりの給食を、気持ちよさそうに戻していく涼を見て、沙織も思わずこみ上げそうになったが、そこは

なんとか我慢した。

不思議な罪悪感（2）

「沙織さん、制服が汚れちゃったわね」

「いえ・・・」

「制服洗ってあげる。いま教室から体育着持ってきてもらってから、乾くまでそれ着ててね」

保健室を出て沙織の教室へ赴いた先生は、担任の女性教師に耳打ちした。そして彼女が副委員長の子を呼んで言った。

「沙織の体育着を先生に渡してあげてくれる？」

女子は少し驚いて保健室の先生に聞いた。

「沙織、どうかしたんですか？」

「ううん、なんでもないの。先生が預かるから、お願いね」

先生はそう言って、沙織の体育着を受け取り、保健室へと戻っていた。先生がはぐらかしたのは涼が吐いたことを黙っていたからだが、それがかえって教室の中を少しざわつかせた。

不思議な罪悪感（3）

「沙織、汚しちゃってごめんね」

吐いてだいぶすっきりした涼だったが、自分のせいで沙織の制服を汚してしまったこと、そして何より沙織の目の前で吐いてしまったことに落ち込んでいた。先生は念のため保健室のベッドでしばらく休ませることにした。涼はおそらく4時間目の体育で激しい運動をしたあとの給食だったので、胃が食べ物をつまく受け付けなかったのかもしれない。

優しく涼に目配せする沙織を、保健の先生はそつとベッドの隣の部屋に連れていき、いま持ってきた沙織の体育着を渡すと

「脱いだものは、このカゴに入れてね」

と言ってカーテンをさつと閉めた。

カーテンを1枚隔てたすぐ向こう側で涼の気配を感じながら、沙織はなるべく音を立てないように制服を脱いだ。そして先生が持ってきてくれたエンジのブルマーと袖に同色のラインの入った体育シャツに着替えながら、沙織は自分が悪いことをしたわけではないのに、不思議な罪悪感を感じていた。

《なんだろう、こんな気持ち、前にもあったような・・・》

沙織は脱いだ制服の入ったカゴを先生に渡した。先生は

「じゃあ洗濯して干しておくわね。薄いからたぶん放課後には乾い

てると思う。先生はこれからちょっと留守にするけど、あとでこいで着替えていってね」

と言つて沙織を見送つた。

沙織は教室へと歩いていった。すでに午後の授業が始まつていて、さっきまでざわついていた校内がすっかり静まり返つていた。体育の授業でもないのに、ブルマーのまま校内を歩くことに、沙織は恥ずかしさの混じつた違和感を感じはじめていた。渡り廊下を吹き抜ける風が、沙織の太ももをくすぐつた。校舎から垣間見える山の燃え立つ緑がまぶしかった。

ブルマーの追憶(1)

沙織が教室に戻ると、担任による国語の授業がはじまっていた。ブルマー姿の沙織は、クラス中から一斉に注目を浴びた。なぜ制服を着ていないのか、なぜこんなに時間がかったのか、クラスのあちこちでひそひそ話し合う声が聞こえた。

席に着いて教科書、ノートを広げると、沙織はますます「恥ずかしい違和感」が強くなった。手元の教科書越しに椅子に目を落とすと、深いVのラインが切れ上がったエンジのブルマーがそこにあった。

《なんだろう・・・？ でもブルマーで授業を受けることは、体育祭の前後など今までにもあったはずなのに・・・》

沙織が感じる「恥ずかしい違和感」は、しかし、単にブルマー姿なのが原因ではなく、白と紺色のシャツやブラウス、ズボンやスカートに囲まれながら、自分だけがその格好をしていることが原因なのだと悟った。その思いを振り払おうと懸命にノートを取る沙織だったが、視線の先にいつも半袖の薄い体育シャツとブルマーが目に入り、その思いは片時も消えることがなかった。

《涼のところに行きたい・・・》

沙織は、保健室の涼のことを思った。きっとまだ吐いたことに傷ついている涼を気遣いながら、頼りない格好をして心細い自分を涼に守ってもらいたい、そんなもの憂い気持ちで沙織を支配し始めた。

午前中の体育のあとたくさん摂った水、そして給食で食べたものが次第にもたらしてくる尿意が、そうしたものの憂い気持ちによってさ

らに増幅をわていった。

ブルマーの追憶(2)

やがて板書を終えた先生が、教科書の物語を静かに朗読しはじめた。それは幼稚園のときに先生が絵本を読み進めていく情景と重なった。

ひとり静かな廊下を教室へと歩く沙織。保健室で穿かされたブルマーから伸びる長い両脚が心もとなかった。席に着くと、スカートやズボンを着ているみんなのなかで、自分だけがVのラインのブルマーを穿いていた。それから絵本のときも、運動場でのお遊戯のときも、ふと目を落とすと自分だけがブルマーだった。

それは、みんなからひと目でこの子はおもらししたんだと分かる、恥ずかしい格好。

《そのとき涼はどうしていたのだろうか？》

幼稚園のとき涼と遊んだ記憶はあったが、そのときの涼の姿が沙織の記憶にはなかった。

《私が恥ずかしいときに、涼くんはどこにいたの？》

記憶の中で、沙織はまるで助けを求めるかのように、涼のことを探し続けた。

おもらし(1)

担任の女性教師の朗読は続いた。それと重なるように幼稚園の先生が絵本を朗読していた。

物語が進むにつれ、尿意の絶頂の波が繰り返し繰り返し沙織を襲ってきた。高まる一方の尿意に、沙織は次第に心細くなり、心が折れていった。波の間隔は次第に短くなっていった。

《おもらしするときって、こつこつという感じだった・・・》

そして、波の間隔がゼロになったとき、沙織のショーツがふわっと暖かくなった。あつという間にあふれて広がる暖かい水が、おしりの間で踊るように渦巻いた。それと関係なく話す先生の声を聴き、表情を伺いながら、沙織は身体の力が抜けていった。ふと椅子に目を落とすと、自分の太ももの間に透明な暖かい水が流れ出していて、それが椅子の端に達すると同時に床に落ちて音を立てた。

絵本を読んでいた先生が音に気づいて、沙織に声をかけた。

《あら、サオリちゃん、またおしっこしちゃったの?》

沙織がこっくりとうなずいて立ち上がると、椅子の下にはまだ透明な水たまりが広がり続けていた。先生がまるでいつものことのように沙織に言った。

《保健室、曲がったとこ、ひとりで行けるわね、いってらっしゃい》

おもらし(2)

いつもは厳しそうな担任の女性教師は、このとき珍しく叱ったりしなかった。

「沙織さん、おしっこしちゃったの？」

そして先生はざわつくみんなに向かって言った。

「沙織さんは、じつはさつき涼くんのお世話で、ちょっとショックを受けたの。だから仕方ないのよ、笑わないこと」

沙織は目を伏せたまま、立ち上がった。沙織のおしりはぐっしょりと濡れて光っていて、太ももにしずくを伝わっていた。

「沙織さん、えっと・・・保健室・・・」

先生が口ごもりながら言いかけると、沙織は

「大丈夫です、ひとりで行けます」

と言って教室を出た。

さつきと同じ道を逆に向かって沙織は歩いた。渡り廊下を吹き抜ける風が沙織のおしりと、しずくが伝う太ももを冷たくした。燃え立つ緑がまぶしすぎて、沙織の目がにじんだ。

エピソード〈おもしろしからはじまる恋〉(1)

廊下を歩き、すっかりおしりが冷たくなった沙織を、保健室の暖かい部屋の空気が包み込んだ。いつもおしっこを漏らしてやってくる沙織に、幼稚園の保健室の先生はにこやかで暖かかった。

《しょうがないよね。我慢できなかったんだもんね》

そう言いながら、沙織のパンツを下ろす隣のベッドに、涼が横たわっていた。

《涼くん、ここにいたんだ・・・探したんだよ》

「沙織、おしっこ漏らしちゃったの？」

涼が身体を起こして沙織を見るなり言った。涼のベッドの傍らに立ったままうつむいていた沙織は、涼の言葉に驚いた。

「え・・・どうして分かるの？」

「沙織、幼稚園でよくおしっこ漏らしてたから」

「そうだったんだ・・・」

沙織はどうしていいか分からないまま、黙って立っていた。すると、

「おしっこ、気持ち悪いでしょ？ 脱がせて、拭いてあげる」

涼がそう言っで、おもむろにベッドの脇の引き出しを開けた。そこにはパンツとタオルが仕舞ってあつて、涼はそれらを取り出して沙織の前のベッドの淵に腰掛けると、沙織のブルマーのゴムに手を掛けて脱がせはじめた。

エピソードぐもおもらしからはじまる恋(終)

あつという間の出来事に、沙織は呆然としていた。でも幼なじみで、身体の具合が悪いはずの涼がしてくれることに、沙織は拒むことなく身を任せていた。

「どうして、パンツが仕舞ってあるとこ、知ってたの？」

「なんとなく沙織が来るような気がしたから、さつき確かめておいたんだ」

「そう……。私、いつもこんなふうに、おしっこ漏らしてたのかな？」

ひざ下まで下ろされたブルマーとショーツを涼が脚から外しやすいように、沙織は涼の前で片足ずつ上げながら言った。

「沙織がおもらしするのと同じくらい、僕はいつも気持ち悪くて保健室に行ってたから」

涼はそう言いながら、沙織のきれいな下腹部とおしりにタオルをあてがい、両方の手のひらでしっかりと押し付けながら隅々まできちんと水分を取った。それが終わると、そのタオルを徐々に太ももへとずらしながらしっかりと拭いていった。

沙織はもちろん恥ずかしかつたが、涼の力強い手の温もりが気持ちよくて、涼のなすがまま身を委ね続けた。

「涼くん、拭くの上手だね・・・」

「いつも先生がこうしてるの、見てたからね。でもあのときと違って、沙織、大きくなったね」

「恥ずかしい・・・」

沙織の心に、ふたたび幼稚園の保健室が浮かんできた。いまこのとき、涼といっしょに過去を共有できていることが沙織はうれしかった。そして涼と近づけた気がした。

《でも、おもらししちゃった私のこと、嫌いに思っただけ？》

ふと不安になったとき、涼がくるくると丸めて片方ずつ裾を広げて差し出してくれたパンツに、沙織はそっと足を通した。それをきゅっと持ち上げて、沙織のおしりを包み込んでくれた涼の手の暖かさ、沙織の不安は消えていった。

(終わり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1047z/>

ブルマーの追憶 ~おもしろからはじまる恋愛小説~

2011年12月11日17時52分発行